

13 家計に於ける位相性について—Wyand の

Norm of Living を中心として

東京大学 松下英夫

家政学の本質がその位相性にあることは最近の T. Parson や R. J. Havighurst の文献にも見られ、その一試論は前に報告〔拙稿「生活行為の平面的範疇について」(家政学雑誌 Vol. 9. No. 4) 及び「家政学本質理論建設のための時間的範疇について」(家庭科学第 21 集)「人間経済学について」(家庭科学第 19 集)〕したが家庭生活の具体的表現たる家計に於いて、かかる「位相性」は実際に如何なる形態をとって現れるか、又それらは如何にして測定され得るかの家政学としての独自の分析方法の研究は必ずしも注意されていないようである。

この点につき、既に Wyand は「生活実程」(level of living)「生活標準」(standard of living) 以外に「生活規範」(norm of living) の概念を規定し、個人の生理的・心理的、社会的、経済的〔所謂位相的〕典型的根拠としての「生存又は健康と品位の生活実程に於ける家族を維持するに適切な予算の内容と費用」とを決定する「選択模型」に於いて、かかる「位相説」把握の努力を示しているが、吾々は彼のこの「生活規範論」を出発点とし乍ら、更にこの上に量的には Stackeberg 的「時間的均衡」要素や、質的には Havighurst の「発達課題」概念等による時間的不可逆性を導入することにより、彼のいう「規範決定の限界「克服への途に approach せんと試みるものである。